

【国際交流／国際支援】

2014年度トルコ親善ボランティアミッションに参加して

トルコ親善ボランティアミッションは、2014年2月19日から27日の9日間、ボランティアセンターの学生メンバー合計14人がトルコ共和国（主にイスタンブール）を訪れ、現地の大学生と交流を図るとともに、トルコのNGO キムセヨクムで短期のボランティアをおこなった活動である。学生のほとんどはトルコを訪れるのは初めてで、イスラム教という関わりがあまりない宗教の国に戸惑いがあるのが最初に見られた。しかし、現地学生との交流やボランティア活動によって、私たちのイスラム教への考え方、トルコという国のイメージが変わっていくのを感じられた。また、トルコが抱えるシリア難民問題を間近で見ると、多くの学生にとって国際問題を考えるキッカケになった。学生はこの短期間の活動で様々な経験、体験を通じて、世界で起こっていることを真摯に考える機会であったと感じている。詳細を学生との交流、ボランティア活動の2つに分けて報告する。

【トルコの大学生との交流】



トルコに到着した当日にスレイマン・シャー大学、イスタンブール工科大学の学生と交流を図った。短期間、短時間ではあったが、友好的な関係を築けた。各大学に赴き、それぞれの特徴や、歴史などについて聞いた後に、女子は浴衣、男子は法被を着て「東京音頭」を披露した。東京音頭は現地の学生に好評であった。踊りの後には、トルコ人学生に半被を着せてあげて、日本のことを英語で説明した。スレイマン・シャー大学の学生はトルコで有名な楽曲を伝統的楽器で演奏してくれた。立ち見の観客ができるほどに盛り上がり、互いによい文化交流ができたと感じている。イスタンブール工科大学では日本語を学習している学生たちと会うことができた。日本語を勉強しているだけあって、日本の文化に興味を示していた。何人かは日本語が話せる学生だったので、日本に帰国後も交流が続いている。また、交流日とは別の日のイスタンブール視察の際、同大学の学生はサプライズで私たちの前に現れ、視察に同行してくれた。最後は、トルコのお土産を私たち1人1人に渡してくれるなど、予想以上の関係を築けた。トルコの学生たちは皆社交的であり、積極的に話しかけてくれたのを覚えている。学生同士の交流を図ることによって、宗教や文化の違いを超え、関係を築けたことは、新たな出会いや学びができたと感じている。

【NGO キムセヨクムでのボランティア活動】



学生達は2日間にわたって、トルコのNGO「キムセヨクム」にてボランティア活動をおこなった。活動内容は、シリア難民やトルコの貧困層への衣服配布、フェルトの飾り作り、各家庭に赴き支援物資の配布をするなどであった。多くの学生はテレビの向こうで見ていたシリア難民の現状を目の当たりにして衝撃を受けていた。キムセヨクムの事務所に来る難民の中には、着の身着のまま訪れる人たちも多く、学生は現実を受け止められず、

その日のボランティア活動を終えると黙り込む姿が見られた。このボランティア活動ではイスラム教の「喜捨の精神」にも触れることができた。キムセヨクムにある物資はすべて新品のものであり、古着は一切ない。イスラム教には「自分が欲しいものを他人にもあげるべき」という教えがあるからだという。自分がしてもらってうれしいことは相手にもする。日本でもよく聞くこの言葉はトルコでは多くの人の胸に刻まれている。今回のボランティアを通して、今まで各々持っていたイスラム教に対しての価値観が変わっていく姿が学生の間で見られた。故に、各自がおこなっているボランティア活動とこのトルコでおこなったボランティア活動を比較し、新たな考え方を学生同士で共有する姿が印象的であった。そこには、シリア難民の姿や、イスラム教の精神から得た国際的視点を取り入れられていた。2日目には、シリア難民の子どもたちが通う学校に支援物資を届けるため訪れた。支援物資を届けた後、私たちはここでも「東京音頭」を披露し、子どもたちはシリアの伝統的ダンスを踊って国際交流をおこなった。シリア難民の子ども達にとってよい経験になったと支援学校の先生が言っていた。学生たちが見た子どもたちの姿は、難民ではなかった。それぞれ夢を持ち、勉強をし、日本の子どもたちと何も変わらない。違うのは国を追われたことである。トルコで感じ、学んだことは、国や人種、民族など関係なく、助けを求めている人に手を差し伸べるというイスラム教のボランティア精神である。トルコでの親善ボランティアミッションは学生にとって、国際社会で現在何が起きているかを学ぶよい機会であり、現地での活動で学んだボランティアの精神を今後、各々の活動に活かし、社会貢献につなげるために、努力したい。

(学生メンバー 国際学部国際学科)

国際グループワークキャンプを通して得たもの

私たちは、海外でのボランティア実施に向けての最初の一歩として、国内でボランティア活動をおこなうことにした。「特定非営利活動法人 NICE（日本国際ワークキャンプセンター）」の協力のもと、栃木県でワークキャンプを実施した。国際ワークキャンプとは、世界の若者が2～3週間一緒に生活しながら、地域住民と環境保護、福祉、農村開発などに取り組む、国際ボランティア事業である。

私たちは2泊3日で実施し、メンバー以外にもマレーシアやベトナムから来ているボランティアの人たちと作業をし、共同生活をした。主な活動内容は、森林・竹林を整備し開かれた場として活用できるようにすること。そのため現地では、トチギ環境未来基地や地元の方々（環境 NPO かぐや姫）に作業指導してもらいながら実際にのこぎりを使って高さ3～4メートルもある竹を必死に切っていた。最後の日には1人でも竹を切り倒すことができるようになり、達成感があった。皆夢中になって作業にあたった。最終的に、竹が乱立していた場所がとてもきれいになり、子どもたちが遊べるスペースや憩いの広場が完成した。みんな、力仕事で疲れていたがとても良い笑顔で、協力しあいながら完成したことに喜びを感じた。

竹林保全以外にも、夜はチームビルディングのレクリエーションをおこなったり、トチギ環境未来基地の5周年をお祝いして、皆で代表の好物のお好み焼きを作ったり竹を使って記念になるものを作成した。最終日には、地元の方と交流する機会を設けてもらいお話を聞き、各自学びを得ながら盛りだくさんのワークキャンプは終了した。

ワークキャンプを通して、ボランティアとは何か皆で話し合い、チームで協力することの大切さや、身近にある竹林について自分たちが出来ることは何か積極的に考えることができた。また一人ひとりが責任をもって動くことができるようになり、学びが多いワークキャンプとなった。



未来基地、かぐや姫、栃木ユースの方々と一緒に

(学生メンバー 国際学部国際学科)

バングラデシュ・スタディツアー ～学び、出会い、「再発見」～

私にとって2回目のバングラデシュ訪問となる今回のスタディツアーは、様々な「再発見」があった。現地での出会いや様々な発見、そして感動について、「再発見」した3点に触れつつ書いていきたい。

1) ポテンシャル

まず、バングラデシュのポテンシャルを「再発見」できた。企業参入やODAに関するニュースで取り上げられることは多くなったが、「アジアの最貧国」というイメージが私たちの頭に張り付いているのではないか。乳児死亡率の高さや貧富の差など様々な課題が存在することも事実である。

しかし、そうした中でもバングラデシュの人びとは懸命に生きている。例えば、今回訪問したJAAGOという教育支援のNGOでは、多くの子どもたちが英語や算数、音楽などを、目をきらきらさせながら学んでいた。特に英語は、大学生の我々と遜色なく対話できるほど堪能であった。ある少女は、「勉強するのが楽しい」と屈託のない笑顔を輝かせながら話していた。社会を支えるのは、若い世代である。彼らが希望を持って前に進み続ける限り、バングラデシュも成長していくであろう。現に、20年後には、バングラデシュのGDPは世界10位に入ると言われている。バングラデシュの秘めた可能性は、極めて大きい。



JAAGOで授業を受ける子どもたち

2) 熱意

次に、我々が訪問した社会起業家やNPO職員たちの熱意も「再発見」した。今回の渡航の前に、バングラデシュの文献を読んで、色々な社会起業家やNPO・NGOの存在、そして、彼らの取り組みを学んだ。

彼らの情熱や気概は、インターネットや本で学んだ以上のものであった。質の高い授業は首都ダッカで提供されていることが多い。この授業を録画し、ダッカから離れた農村部でもDVDで提供する教育支援団体「e-Education」について、ダッカ大学卒業生のマヒンさんがプレゼンテーションをしてくれた。彼は農村出身で、バングラデシュ最難関のダッカ大学に入学することができた。いまではe-Education創

設者の税所さんとともにバングラデシュの教育水準をあげようと奮闘している。e-Education やバングラデシュの教育について語るマヒンさんの目には力強い情熱が宿っていた。熱い思いがあるからこそ、e-Education は大きく発展できたのだと考える。バングラデシュの発展を支えているのは、こうした多くの人々の努力と情熱なのだと感じた。

3) 絆

最後に、バングラデシュとの絆を「再発見」した。冒頭で述べたように、私にとってこれは2回目のバングラデシュ訪問である。1回目は2014年の2月、ボーイスカウトの海外派遣に参加したのがきっかけで、数多くの仲間と知り合った。今回のスタディツアーに参加することを決意した際は、バングラデシュの仲間たちに連絡を取り、再会を果たすことができた。今回のスタディツアーの公式プログラムでは、現地の若者と交流する機会が少なかったため、参加学生にとっても良い機会となったのではないかと思う。バングラデシュの仲間たちも、再会（及び出会い）を心から喜んでくれた。

また、参加学生との絆も深まったと感じる。スタディツアーで初めて顔を合わせた人がほとんどであったが、終始とても良い雰囲気であった。ツアー中に一人も体調を崩さなかったのは、こうした明るい雰囲気や、互いに無意識に気を配りあえたことが大きいと思う。学び、交流、全ての面で今回のツアーは素晴らしいものとなった。ひとえに、携わってくださった方々の篤い協力のおかげである。この場をかりて、御礼申し上げたい。

最後に、私の好きな詩の一節を紹介したい。「水面を見つめているだけでは、海を渡ることなどできない」(Rabindranath Tagore)。多くの社会的課題を今回のツアーで発見した。それを見るだけで終わってはいけない。これからさまざまな方法で、バングラデシュだけでなく、課題を抱える国や地域について学び、行動を起こしていくのが、これからのミッションであると考えている。スタディツアーは、「真の探求の旅」のスタートラインなのである。



スタディツアー参加学生とバングラデシュの仲間たち

(学生メンバー 国際学部国際学科)

国際ガールズ・デー

【活動経緯】

海外プログラム事業部ガールズ・チームは、国連が定めた「国際ガールズ・デー」(10月11日)の日本国内での普及と世界の女の子たちを支援するために NGO や企業、国際機関、教育機関などにより発足した「国際ガールズ・デー推進ネットワーク」のメンバーとして 2013 年度から活動することとなった。ほかにも「女の子だから」教育や医療等を十分に受けることができない子どもたちのために、生きる力を与えようというプラン・ジャパンの「Because I am a girl キャンペーン」に協力している。

【活動内容】

「国際ガールズ・デー」の認知を広めるために、国際ガールズ・デーにあわせて啓発活動をおこなっている。2014 年度の国際ガールズ・デーは、戸塚にある男女参画センター横浜との共同企画でイベントを開催した。本学国際学部の齋藤百合子先生や明学 OG で「女子高生サポートセンター Colabo」代表の仁藤夢乃さん、神奈川県立田奈高校の金澤信之先生をお招きしてパネルディスカッションをおこなった。また、映画上映会やハンガーバンケットをアレンジしたワークショップでは、大人だけでなく、子どもにも貧困や男女の差異を体験してもらう機会となった。横浜校舎では、世界に支援を働きかけるプラン・ジャパンの「Raise Your Hand」キャンペーンの参加や、国際ガールズ・デーのテーマカラーであるピンクにボランティアセンターを染める「ボラセンラッピング」をおこなった。また、去年から参加している書き損じ・未使用はがきキャンペーンと同時開催で、横浜校舎の生協で関連図書ブックフェアをおこなった。はがきキャンペーンでは多くの方にご協力いただき、金額として 100 万円を超えるほどの枚数が集まった。皆様の善意に感謝したい。

【今後に向けて】

今年の「国際ガールズ・デー」では、明学生を含めもっと多くの学生に参加を呼びかけることが新たな課題



「Raise Your Hand」で世界の女の子に応援メッセージを掲げるメンバー

となったが、学外では小学生から大人まで幅広い世代の方と意見を交わし、輪を広げることができた。幸いにも私たちは、人や出会いに恵まれ、多くの方に支援をして頂くなかで活動している。本格的に活動を開始してから 2 年目で未熟な部分が多くあるが、これからも繋がりを大切にするとともに、向上心と挑戦する心を持ち続け、活動していきたい。

(学生メンバー 国際学部国際学科)

国際機関実務体験プログラム～国際熱帯木材機構 (ITTO) での実務体験研修から得たこと

私は2014年の夏、さまざまな言語を使い国々を跨ぎ、環境に関われるキャリアを考えるきっかけを得られたらと思い、プログラムに参加した。このインターンにあたり、ITTOという国際色が豊かで熱帯雨林を専門とする機関で多くの方々と関わり、仕事に携わることで自分のキャリアを明確にしたいと考えた。それを遂行するにあたり、英語力の向上、仕事とは何か、異文化理解という三つの目標を立て、様々な業務に取り組んだ。

ITTOでの業務は主に広報業務とフェローシッププログラムの補佐をおこなった。広報では、プロジェクトサーチというWebサイト製作の手伝いをした。主にITTOがどのような活動をおこなってきたのかを確認し、一般公開用のすべての書類がそろっているかをまとめる仕事である。またフェローシッププログラム(奨学金制度)では、応募者から寄せられる書類の要約、データベースの管理、アンケートの集計など、さまざまな業務に携わった。

私はこのプログラムの目標の一つとして英語力の向上を挙げていたが、専門用語の学習方法を学ぶ機会となった。例えば初めて知る単語や専門用語をノートに書き取り、その単語を使い自分なりの文章を作るという工夫ができるようになった。一方、応募理由を要約する際には、応募者の熱意をいかに伝えるのかを考えることで、楽しく意欲的に取り組むことができた。この業務を通して、応募者の皆さんは自国の問題をしっかりと理解しており、問題解決のためには何が必要でどうすべきかを深く考えていることがわかった。このことから自分の国を知らなくては異文化理解などできないと実感し、日本のことを勉強しようと思った。

このプログラムへの参加は、私の仕事への考え方にも影響を与えた。それは、仕事とは他者のためであると同時に自分のためでもあるということだ。効率よく多くの仕事をする上で誰のため、何のためなのかを考えることで、他者のためにしていたことが最後にはすべて自分への恩恵としてかえってくるからだ。

最後にこの夏を通して実社会で働くとは、どういうことなのかを体感することができたと思う。大学では与えられた課題をこなすことが多い。しかし仕事は与えられるのを待つのではなく、自分から探し、行動しなくてはならない。私はこのインターンシップを通して、多くの国の人々と環境や生活に関するビジネス、貿易等の仕事をしてみたいと考えるようになった。また海外の企業は成果主義であるため、日本だけでなく世界を舞台に実力を発揮できるようになりたいという意欲が芽生えたのは、大きな収穫である。インターンシッププログラムに参加する機会をいただけたことを感謝したい。

(国際学部国際キャリア学科 学生)

国際機関実務体験プログラム～ YOKE でのインターシップを経験して

私は国際都市横浜だからできる多文化共生のあり方について学びたいと考え、公益財団法人横浜市国際交流協会（以下 YOKE）でのインターンシップを希望した。研修にあたって二つの目標を立てた。一つ目は、今後国際協力のボランティア活動や将来の仕事にこの経験を生かすために、自分の弱点を克服すること。二つ目は、外国につながる子どもたちの学習支援を通じて、YOKE の役割を理解し、自分は今後どう関わっていけるかを考えることであった。YOKE の多文化共生事業として参加した横浜市内の外国人区民人口における上位 3 位の中区・南区・鶴見区の三つの国際交流ラウンジで実施している「外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援教室」（区の業務委託事業）では、実際にブラジル人の小学生の女の子に宿題を教えた。また 3 区のラウンジを比較し、それぞれの区の歴史や特徴を知ることによって YOKE の役割に気づいた。そこからわかったことが三つある。一つ目は外国につながる子どもたちの置かれている状況である。彼女たちは学校の中ではマイノリティになっており、来日したばかりの生徒の中には、学校の授業を理解する学習言語を獲得することが難しい生徒もいた。二つ目に、中区、南区、鶴見区に在住する外国につながる子どもたちの出身国にバラツキがあるため、彼らの文化的背景を考え、さらには区の方針に合わせた学習支援教室作りがされていた。三つ目に、それらのラウンジの運営を受託する YOKE は、区や横浜市の信頼に応えながら、外国人のニーズと日本人ボランティアの善意を、コーディネートしていることがわかった。

私は研修中に自分自身の弱点を見つけた。たとえば、自分の考えがすぐにまとまらずに、言いたいことが相手に伝わらないということがあり悔しかったことである。そこで改善策を見出した。自分の考えを整理するために常にノートを持ち歩き、気づいたことや発見したことをすぐに書き留めた。また、伝えたい内容を明確に示すために、話す順序を変えたり、相手の負担にならない質問の仕方をしたりするという方法をとるなどの工夫をした。大学生の私が学習支援の場でどう関われるのかという課題も見つけた。三つのラウンジのうち二つのラウンジでは、学習支援のボランティアと生徒の組み合わせが固定化されていて、外国につながる子どもたちの支援に大学生が直接関われる機会が少なかった。そこで私は学習支援以外に子どもたちを支援できないかと考えた。早速、大学生ボランティアのメンバーと共にラウンジの館長にインタビューをして、どのように大学生が関わるができるか考えた。そして最終報告会で外国につながる子どもたちと日本人大学生の結びつきを作る提案をすることができた。今後は、この提案を発信・実現するつもりである。

YOKE の皆様、研修でお世話になりました。関係者の方々、ボランティアセンターの市川さん、大変お世話になりました。ありがとうございました。

(国際学部国際学科 学生)